9 月 12 日のメッセージ

聖書：ヤコブの手紙　2：　8－13

「憐れみは裁きに打ち勝つ」

この世界に暮らしているのは、教会に共に集う人ばかりではありません。その人たちのことを、聖書は「隣人」と呼びます。しかし、隣人とは何でしょう。自覚的に「この人は隣人だ」「この人は違う」と区別できるものではないように思えます。また、親しい人、自分に有利な人にだけ手を差し伸べたところで、それは自己満足を生むだけに過ぎません。

イエスは出会った全ての人と交わりをもたれました。そして、その交わり全てを保とうとされました。自分を殺そうとする者たちとも交わりを絶たれませんでした。だとすれば、隣人とはやはりこの世界に生きる全ての人を差すのでしょう。

その関係は良好なものばかりではありません。知らずに相手を傷つけてしまうこともあるでしょう。知っていて傷つけることもあるかもしれません。もちろん、相手に傷つけられることもあります。自分にとって都合の良いものも良くないものも含めて、全ての人と交わり続ける上で大切なのは、隣人を自分のように愛することです(「第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。」マタイによる福音書 22:39)。

その交わりは、友に災いをもたらさない関係となるでしょう(「舌には中傷をもたない人。友に災いをもたらさず、親しい人を嘲らない人。」詩編 15:3)。

また、相手を赦すことのできる関係となっていくはずです(「しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。」創世記 45:5)。

もし自分は赦してもらいながら他者を赦せないならば、その関係は健全とは言えません(「あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」マタイによる福音書 18:35)。

しかし、この関係は全て自己犠牲であってはなりません。誰かが我慢して、良好に見える関係を続けたところで、それは空しいものです。「自分が我慢しさえすれば」は「自分だけが良ければ」の裏返しです。自分にとって都合の良いものを求めているだけです。

互いに赦し合い、助け合い続けること。裁きではなく憐れみをもって相手と向き合うこと(「人に憐れみをかけない者には、憐れみのない裁きが下されます。憐れみは裁きに打ち勝つのです。」ヤコブの手紙 2:13)。

その時、隣人としての関係が始まります。ある瞬間をもって隣人になり、それが永遠に続くのではありません。その意味で、隣人関係もまた、プロセスです。共に良い関係を模索しながら、今日も私たちは隣人として共に生きるのです。